

湘南医療大学

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学  
所属 専攻科 助産学専攻  
名前 今野 和穂  
作成日 2023年9月19日

## 1. 教育の責任

湘南医療大学の理念「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」にかなう助産師を育成することが助産学専攻科の准教授としての責任である。そのために、学士課程における看護学の知識技術を基盤として、産科医療の高度化・多様化に対応し、地域母子保健を支える実践力を身につけ、諸問題に対応できる実践家としての助産師の養成に努めることである。

### 担当科目

- ・ウイメンズヘルス（必修）前期 15 回中 4 回
- ・助産診断・技術学Ⅰ（妊娠期）（必修）前期 30 回
- ・助産診断・技術学Ⅱ（分娩期）（必修）前期 30 回中 12 回
- ・助産診断・技術学Ⅲ（産褥・新生児期）前期 15 回中 3 回
- ・助産診断・技術学Ⅴ（ハイリスク）（必須）通年 15 回中 4 回
- ・健康教育論（必修）後期 8 回中 7 回
- ・地域母子保健（必修）後期 8 回中 4 回
- ・地域母子保健活動論Ⅰ（地域母子保健サービス）（必修）後期 8 回中 2 回
- ・地域母子保健活動論Ⅱ（専門職との協働・連携）（必修）通年 15 回中 11 回
- ・助産学研究（必修）通年 15 回中 10 回
- ・助産学実習Ⅰ（継続）（必修）通年
- ・助産学実習Ⅱ（必修）通年
- ・助産学実習Ⅲ（地域母子保健）（必修）後期
- ・助産学実習Ⅳ（助産管理）（必修）後期

## 2. 私の理念・目的

### 1) 私の理念

私は、大学の理念、専攻科の教育目的に基づき、①学生がエビデンスに基づく知識を自ら獲得し、考える力を育てる、②臨地実習において知識と実践を結びつける、③看護の対象者を大切にすることを理念としている。

#### ① 学生がエビデンスに基づく知識を自ら獲得し、考える力を育てる

医療の高度化・多様化に対応できる実践家として卒業後に社会に貢献していくためには、自分の置かれた状況の中で必要な知識を、エビデンスレベルの高い情報源から適切に獲得し、得られた知識を生かした看護の対象者へどのように対応するかを考える力が必須である。

#### ② 臨地実習において知識と実践を結びつける

学習によって得た基本的な妊娠・分娩・産褥期の身体的・心理的变化、新生児の子宮外環境への適応過程の変化が実際の場面ではどうなのか、正常な経過と照らし合わせて確認することで知識の定着と個別性への気づきにつながる。また、学習した知識が活用できた経験は助産・看護の楽しさを感じる機会になり、学習意欲の向上につながると考えられる。

### ③ 看護の対象者を大切にす

本学の理念である「個を敬愛す」にもつながることであるとともに、卒業後に助産師として活動していく上で最も大切にすべきことだと考える。生命の誕生に携わる者として、妊・産・褥婦、新生児一人一人を尊重し、この人のために何かをしたいと思う気持ちをもって助産行為を実践する助産師を育成したい。

#### 2) 理念をもつに至った背景

私自身、学生時代に臨地実習によって自分の学んだ知識が活用できたとき、知識と実践が結びついたときに看護・助産の楽しさを実感することができた経験がある。今年入学した学生は、コロナ禍に学士課程を過ごした学生も多く、臨地実習の経験が少ないことから学習によって得た知識を実際の場面で確認したり、実践することに戸惑いを感じている。臨地実習先では、積極的にケア対象者に関わる機会やきっかけを提供し、状況に応じて必要な知識・適切な情報を入手し、それを基に必要な看護を考え、実施し、評価を通して自らのケアについて考えるという看護の基本的なプロセスを体感し、看護・助産の楽しさに気づいてもらいたいという思いをもった。また、私が学生時代に継続事例として分娩介助をさせていただいた方々とはいまだに交流がある。その時に生まれた子は既に親となって次の世代を育成しているが、それまでの成長と一緒に見守ることができたこと、新しい家族をつくっていく過程にかかわることができていることは私にとって大きな喜びとなっている。そのため、学生達にも自分の関わった方、一人一人を大切にする心を忘れない助産師になってもらいたいと願っている。

### 3. 教育の方法・戦略

#### ① 学生がエビデンスに基づく知識を自ら獲得し、考える力を育てる

担当科目である助産診断・技術学 I の中で、妊娠期のマイナートラブルについて機序と対処行動を調べる個人課題を与え、その際にエビデンスの提示を求めた。また、調べた内容をもとに、妊婦から訴えがあった際の返答を口語で記載させた。そのうえで、授業の中で個人課題での知識を活用できるような事例を与え(添付資料1)、4~5 人程度の小グループワークで他者の物事の調べ方、課題の取り組み方、考える視点の違いを知り、各自の考えをブラッシュアップする機会を持たせた。その後グループワークでまとめた内容を発表することで、更なる知識や考え方のブラッシュアップにつなげた。毎回の授業で扱う事例を変えながら、小グループのメンバーを変えて取り組んでもらった。また、グループワークの発表方法も実際の場面を想定したロールプレイの実施をさせるなど少しずつ実践の場面での知識の活用を想定した形式に変えていった。同じ事例の中での妊婦への説明や対応であっても、声のトーンや話すスピード、説明の仕方などに違いがある。発表後はお互いの発表を聴いての気づきを意見交換させ、妊婦への対応の仕方や保健指導の仕方について自ら考える機会とした。毎回の授業の中で、デブリーフィングを丁寧に行うことを心がけた。

#### ② 臨地実習において知識と実践を結びつける

現在、妊・産・褥婦、新生児を受け持たせていただき助産ケアを実施する中で、学生各自が知識と実践の統合に努めている。私は臨床指導者、スタッフの皆様と協力し、学生がより多く

の経験を持てるよう調整に努めている。また、事前に学習してきた内容・知識を確認し、実際の場面で対象者はどうであったのかを学生に語らせる機会をもつことや、指導者の実施したケア内容を後から振り返り、この時指導者はどのように考えていたと考えられるか、そう考える根拠となる知識は何かを確認させることを繰り返し実施している。

### ③ 看護の対象者を大切にする

私自身が関わらせていただく妊・産・褥婦、新生児に敬意を払い大切な一人として対応する態度を見せること、スタッフの皆様がそのようにしている場面で学生にそのことを気づかせることを意識的に実践している。分娩介助させていただいた産婦へのバースレビューの中でも産婦が大切にされたと感じながら過ごせたことの意味を考えさせる声かけを学生に対して行っている。また、分娩介助させていただいた方の入院中退院までの毎日のケア、2 週間健診、1 か月健診に関わることで、自分の実施した助産がその後どのように影響していくのかを知るとともに、人生の重大な場面に関わり、その後の家族を支える者としての助産師の役割について考えさせ、人を大切にする心の育成に努めている。

## 4. 学習成果

助産診断・技術学 I の授業を通し、学習してきた知識・技術・コミュニケーションスキルを活用し、助産師が妊婦健康診査を実施する演習を行った。妊婦役へは健診時に質問する内容を提示し、子宮底・腹囲の測定や胎児心音聴取などの妊婦健康診査項目実施後の助産師からの健診結果のフィードバック時に質問をさせ、助産師役は今まで学習してきた授業での知識と経験をもとに妊婦の質問に返答する機会を設けた。どのような質問をされるかは事前にまったく知らされていない中で、多くの学生は適切に質問に対応することができていた。終了後のデブリーフィングにおいても、積極的に意見交換ができ助産師としてよかった点を伝えあうことや、よりよくするための改善点が見いだせていた。15 回の授業の中での学びが、形として表現されたことは学生自身にとっても成長を実感する機会となっていた。また、臨地実習で妊婦と関わる際の自信にもつながっていた。

## 5. 改善のための努力

- ・ 授業説明について、時間を有効的に使用してスムーズにグループワークを進めるために、初回のオリエンテーション資料に、各回のグループワークの進め方についてのイメージを提示する。
- ・ 卒業学校によって学習の仕方、エビデンスの確認方法にバラツキがあったことから、学生の学習方法や状況を確認する機会を設ける。
- ・ 実習期間中に個別面接を取り入れ、各学生が自己の成長に気づく機会を持つとともに、課題の明確化を促す。

## 6. 今後の目標

### <短期目標>

- ・ 教育成果の評価を明らかにする

科目講義終了後に授業内容に関するアンケート調査を実施、実習終了後に実習を終えたうえで、実習中に役立った実習前授業内容や課題についての意見を調査する。

### <長期目標>

- ・ 高い学生満足度および学習成果が得られる授業を展開する

教育成果の評価の結果を次年度の授業構成、内容に活用することで、授業改善のための工夫や自己研鑽を続け、最新の知識や技術を導入し、魅力ある授業を展開できるようにする。

### 【添付資料】

資料1:助産診断・技術学 I 課題、授業内グループワーク事例の一部